

巻頭言

日本の生きる道

川村 浩

東亜大学大学院

日本の時間生物学を大いに発展させるにはどうしたらよいか。これは単に研究費の増額で解決される問題ではない。なぜならば私はわが国の大学の小規模さと古い小講座制度自体が学際的な研究を妨げていると考えるからである。

多くの人は旧帝大を大学の模範と思い込んでいる。しかし本来帝国大学は、明治の初めに後進国の日本が欧米に追い付くために設けたものである。一つの講座に教授が一、助教授または講師が一と助手が二、それに事務員または技術員が一人いれば上等という構成自体が、ヨーロッパでも初期の古い大学のものである。今日のヨーロッパの大学の実験講座には数人から十数人の補助スタッフがいて研究者を雑用から救っている。

こうしたささやかな近代化さえも日本ではついに実現していない。戦後の経済成長の時期に、大学は数だけ増えたが、内容の充実という点で全く取り残された。

米国の学問は大戦前には二流視されていたが、戦後は多くの分野で世界のリーダーの地位についた。それは研究費が豊かなためだけではない。なによりも大学院を最高学府として拡張充実させたからである。一つの学問に異なった視野をもつ多数の教授、助教授を配置して、きびしい競争原理が導入された。また研究費や人員も研究の発展に応じて伸縮させる合理性が尊重された。新しい研究を競うグラント制では、指導を受けた師と同じテーマでは研究費はもらえない。それが若い人に新分野の開拓を迫る動機づけとなった。

日本は戦後アメリカ流の新学制を導入したはずである。だが大学だけはその改革を怠り、米国の学制の最大の長所である大学院を形ばかりしか導入出来なかった。その結果伝統のある大学ほど高度成長に取り残され荒廃した姿になったのである。

今の日本の経済にはまだまだやる気があれば先端的基礎研究と高度の専門家教育の場としての本物の大学院を構築できる余力はあると思われる。大学院の根本的な改革は人と金と時間を要する時間生物学の発展のためだけではない。知的能力しか資源をもたないわが国を衰退から守り、さらに発展させるためにも不可欠なことではないだろうか。